未利用水産資源の活用をすすめる

～テツビンは捨てるほどまずいか？～

カジキ・マグロ類を対象とした小笠原式深海たて縄漁業は好調な漁業生産をあげているが、この漁法で混獲され捨てられている魚があることはあまり知られていない。混獲魚の多くが島名テツビン（和名ヒレジロマンザイウオ）である。これまでまったく不明であった本種の生物学的特性の一部を明らかにするとともに、未利用資源活用の道を探る。「もったいない」を減らすひとつの試みを小笠原から。

実施機関	小笠原水産センター	事業名	小笠原海域漁業調査指導

背景・ねらい

小笠原で 1997 年以降、急速に発展・普及に成功したカジキ・マグロ類を対象とした漁業は、底魚一本釣り漁業に代わって小笠原の主幹漁業へと成長しつつあるが（図 1)、同時に混獲問題を引き起こしている。混獲され、価値のないものとして投棄される魚。その代表が島名テツビンことヒレジロマンザイウオである（図 2)。混獲を少なくする工夫とともに、漁業は食料供給の手段でもあるという原点を見つめなおす

成果の内容・特徴

①小笠原沿岸深海域において小笠原式深海たて縄漁業によってもっとも多く混獲される島でテツビンあるいはエチオピアと呼ばれている魚は、ヒレジロマンザイウオ、同じシマガツオ科魚類であるツルギエチオピア、チカメエチオピアおよびシマガツオの 4 種を含み、大多数がヒレジロマンザイウオであることが判明した（写真 1～4)。

②これまでまったく不明であったヒレジロマンザイウオの生物学的特性の一部を明らかにした。

③大量に漁獲されながらも利用されていなかった未利用水産資源の代表であるヒレジロマンザイウオの活用をすすめ魚価がついた。捨てられていた貴重な資源の適正な評価価値が認知されはじめた。

成果の活用と反映

大量に混獲されながら利用されていないヒレジロマンザイウオの実態を明らかにし、活用をすすめる方策を検討した。ヒレジロマンザイウオを先鞭として未利用水産資源を活用していく道筋がついたことは、今後、現在以上に既存資源の状況が好転する要素は少ないことから、将来的に地域漁業の健全性と持続性の維持、そして食料生産の向上に貢献できるものと考えられる。

（錦織一臣）